

1 情勢報告

津野山地域でナスのIPM技術を推進しています

J A 津野山ナス部会



ナス部会全体会の様子

5月17日に、JA津野山ナス部会全体会がJ A 津野山営農センター「輝」で開催されました。

まず、部会員が今年度のISO14001の環境実践計画書について確認し、部会目標である「化学合成農薬使用量を慣行の4割減にする」を実行するために、自分に取り組むIPM技術の欄にチェックを入れました。

続いて、振興センターから21年度に作成した『IPMマニュアル』を紹介し、高齢者では観察の難しい天敵をつかいこなすための注意点などを説明しました。メーカーからも天敵、微生物製剤について説明を受け、天敵導入への準備と、導入スケジュールなどを確認しました。J A 津野山ナス部会では、今年スワルスキーカブリダニの導入への補助を決め、推進することになっています。

振興センターは、津野山地域の米ナス・小ナスの収量・秀品率向上のために、IPM技術が活用されるよう支援していきます。

大野見米のブランド化の推進

大野見産米研究会が発足



5月21日に、中土佐町大野見地区の米生産農家、町農林課、JA四万十、振興センターが集まり、大野見産米のブランド化等を検討していく研究会が発足しました。町からブランド化の取り組み、振興センターから特別栽培米の説明、JAから栽培暦の説明を行ったところ、指定農薬への統一の難しさなどの質問がありました。今年度は他の農家にも声をかけて、2カ所の実証圃での現地検討会、各自の病虫害防除実績の記録や先進地視察などを行うことが決まりました。

今後も振興センターは、大野見米のブランド化の推進のため、関係機関とともに支援を進めます。

津野山地域の1年生ユズの生育順調

J A 津野山ユズ部会



講習会の様子

5月20日、24日に、津野山地区4カ所で幼木ユズの栽培技術講習会を行いました。今回は、本年1年生ユズを植えた人たち約40人が参加し、振興センターとJAからの剪定の見直し、幼木管理などの説明を熱心に聞いていました。寒害の被害を受けたユズも一部見られましたが、全体として、まずまずの生育でした。

今後も、開心自然形の樹作りを目指して、J A と協力しながら講習会を進めていきます。

1 情勢報告

ニラの産地の育成強化に向け、新規就農者を支援しています

ニラ新規就農者研修会



5月11、25日に、JA土佐くろしお管内の新規就農者2名に対して、ニラ栽培技術や経営管理等の基礎知識の習得に向けて研修会を開催しました。

研修会では、振興センターからニラの栽培特性や経営管理等について講義を行い、参加者からは、栽培に関する質問も積極的に出されました。

また、「ニラの生理生態や栽培技術についてもっと詳しく知りたい」「農業簿記の勉強もしていきたい」といった前向きな声も聞かれました。

今後も新規就農者の研修会を関係機関とともに開催し、現地検討会等にも参加してもらいながら栽培、経営管理技術の早期習得に向け支援を行っていきます。

ハウスシシトウの増収技術、IPM技術を推進しています

JA土佐くろしおハウスシシトウ部会



5月18日に、JA土佐くろしおハウスシシトウ部の現地検討会が開催され、篤農家の栽培概要（整枝技術と開花・着果状況等）、IPM技術取組事例等の検討がなされました。

これまで、須崎地域のシシトウ栽培では天敵利用の失敗事例が多く積極的に導入する動きがありませんでした。22園芸年度には、IPM実証ほで、3回の現地検討会を行ったことで、天敵利用技術の効果が高いことが確認され、認識も新たになってきたように感じられます。次年度には、天敵導入を検討している農家も多いので、振興センターでは取組み農家に失敗させない指導体制の整備も検討をしていきます。

普通ピーマンの増収技術、IPM技術を進めています

JA土佐くろしおピーマン部会



5月13日に、JA土佐くろしおピーマン部会の普通ピーマン栽培者が土佐市宇佐地域の栽培状況の調査と部会実証ほ場で現地検討会を開催し、IPM技術取組事例、増収のための栽培技術等について検討がなされました。

天敵利用技術では、スワルスキーカブリダニの導入によりIPM技術組立が容易になった点、タイリクヒメハナカメムシの未定着ほ場の原因等について活発な意見交換が行われました。

増収技術については、植え付け株数と仕立て本数の関係について議論し、作業労力との兼ね合いも検討する必要があるという意見も出されました。

次年度は、普通ピーマン栽培農家全体でIPM技術の導入と、総合病害虫管理技術グループ実証の取組も検討されています。振興センターでは、この動きを支援して、IPM技術の定着を進めます。